# 富士は日本のものだ

日本のシンボルとして国民が誇りにしている富士山。その富士山のドテッ腹にアメリカ軍は、今日も砲弾をブチ込んでいる。富士をわれわれの手に取返さなければならない。それには一日も早く安保条約を廃棄することだ。いま政府は安保条約を改定して戦争へのさいごの道を進もうとしている。それも国民の目をごま化してだ。いまこそわれわれが立上るときである。
(写真は富士山にタマを打込む米軍＝北富士演習場で)

# 戦争と平和の分れ道

## 安保改定を叩き潰そう

さる四月二十八日でサンフランシスコ平和条約が発動してから満七年になった。時あたかも安保改定問題がうず巻く激流のまっただ中、国民はみずから日本の進路を定めねばならない。そこで安保条約の生い立ちとその爪跡をたどって、改定の意味を探ってみた。

### てした　うまれた　こと生

### シャンデリアの陰で　一人立会つた吉田茂

一九五一年九月八日、米国西岸の街サンフランシスコは対日講和条約の調印式を迎えてにぎわつていた。式場にあてられたオペラ・ハウスのステージもせましと、参加五十一カ国の国旗がかざられ、吉田茂、池田勇人らの日本全権団もうれしそうに緊きようをふりまいていた。――午前十一時五十五分〝片面〟講和条約の調印式ははなやかにその幕を閉じた。

その直後の米陸軍第六軍司令部の下士官クラブ。オペラ・ハウスのはなやかさにくらべてここはなんと寒々としたところであろう。各国代表団はもちろん、日本全権団の姿すら見えない。アチソン国務長官、ダレス顧問らの大男に囲まれて、日本の総理大臣吉田茂がいるだけである。まるで蔑視でもしているように大男たちが見下す中で、吉田は日本を代表してただ一人署名した。日本の運命をきめた日米安全保障条約はこうして生まれたのである。

「安保条約についてはわが国各界とは相談しなかつたから、責任の所在を明らかにする意味で自分だけ署名した」。調印後吉田首相はこう語つたが、なぜこのように軍要な条約を主権者である国民にはひと言も相談しなかつたのか。なぜ調印まで条文をひたかくしにかくさねばならなかつたのか。

話は一年数カ月前一九五〇年五月のある日にさかのぼる。大シャンデリア輝くホワイトハウスの会議室で米国務省高官らが深刻そうな顔を寄せあつて鳩首協議中であつた。議長格のダレス国務省顧問はパイプを片手になぜかいらいらした表情である。そこへ秘書官があわただしく入つてきた。「ただいまの情報によりますと海南島に上陸した中共軍はバルチザンと呼応蔣介石軍の降服は時間の問題となりました」

すでに前年十月中華人民共和国をつくり上げた中国人民は全国的解放の最終段階へ進撃していたのである。米が切札にしていた原爆による力の優位も、すでにソ連の原爆保有宣言であえなくも崩れ去つていた。そして六月の朝鮮戦争ぼつ発を機に日本の永久基地化、再軍備は急ピッチで進んだ。マ元帥の指示で警察予備隊（いまの自衛隊）が作られた。トルーマン大統領は「中ソを除外しても対日講和を結ぶ」と声明し講和予備会談を命じたのだつた。

その頃日本国民の中には占領軍の撤退と全面講和を求める声が大きくなつていた。占領軍と日本政府は弾圧政策でそれにこたえ、レッドパージ、共産党幹部の追放、全労連の解散、労働戦線の分裂工作民主的新聞の発禁、民主運動の弾圧が「占領政策違反」の名のもとに強行された。一方、朝鮮戦争の拡大に失敗したアメリカは、中ソ大包囲陣の実現をあせり、〝アジア人にはアジア人を戦わせる〟政策でまず日本をスツポリ麾下に入れ、不沈母艦に仕上げようと急いだのである。それは日本国内に高まる反米感情を講和＝独立の宣伝によつてすりかえるねらいもつていた。

こうしてアメリカの演出による講和会議の大芝居は〝和解と信頼〟の嘘りもの入りで宣伝されたのだが、しかもそれは一枚皮をめくればアジアのほとんどの国々と社会主義諸国を除外した〝片面〟講和であつたのだ。そしてそのはなやかなシャンデリアの陰で日米安保条約はひそかに生み落されたのである。

### わが　安保　は　羅　条　約

### 憲法違反の正体バレる

### 不肖の子は暴れん坊

わが羅がこの世に生れ出たのは今を去る七年九カ月前。兄貴分の講和条約がハデにチャホヤされたのにくらべてまるでまま子扱いだ。生み落されるまでひたかくしにかくされていたのだし、わが羅のタチもいい方だとはいえないから国民の人気が悪くても仕方のないことかもしれん。

だが、この不肖の子にだつてレッキとした父もあれば母もある。父、すなわちアチソン国務長官やらダレス顧問さんらの米国務省のおえらい方。母なる人はご存知ワンマン吉田茂さんだ。

まずわが羅、かくいう「日米安全保障条約」。学習院大学の清水幾太郎という教授がどこかでこんなことをいいよつた。「日本にとつて安保条約の付属物のようにみえたが、アメリカにとつては安保条約の方が大切であつた」と。わが羅のことをこうズバリといいのけるようでは学習院というところもなかなかおつかないところだ。こうなつては何をかくそう、うわべはまま子扱いでも、両親にとつては兄貴の講和条約よりも目をかけているのがこのおれさ。兄貴がきげんよく「全占領軍は撤退する」と喪きようをふりまいたあと、わが羅がこつそり、どつこいそうは問屋がおろさんぞと、アメリカ軍の日本駐留を取りきめたのじゃ。わが羅には頼りにしている一人息子がいる。その名を「日米行政協定」といつて、生まれたのはわが羅が一人立ち（発効）した日の一九五二年四月二十八日。あんまり大きな声ではいえんのだが……。実はこの子は日本国会の認知も受けていない、いわば無籍も同然のヤツじゃ。そこでもわが羅の顔に免じて大手をふつて歩かせてもらつている。日本というところはほんとに楽天地だ。閑話休題。

わが羅はこの息子に一目も二目もおいている。それというのも、わが羅は全文五条でいわば総元締みたいなものだが、息子の方は二十九条にわたつてことこまかに、アメリカさんが日本でどんなに勝手放題をすることができるかをきめている。米軍基地内の警察権、交通、通信手段の便宜、関税、所得税の免除等々――いやはやまつたく大したもの。わが羅の片腕というより、わが羅の本体といつたがいいかもしれん。

この息子には三人ばかりの子どもつまり、わが羅の孫が三人ばかりいる。「刑事特別法」とか「民事特別法」「土地使用特別措置法」というヤツらじゃが、こいつらは日本国会の腹を痛めて生ませ、日本国籍に入籍させてしまつた。まつたくうまくやつたもんだ。考えてもみたまえ、アメリカさんが日本に勝手に基地をつくつたり核兵器をもちこんだりできるのもわが安保一家のたまものさ。朝鮮戦争や台湾海峡緊張などのように一たん緩急あれば日本はアメリカにとつてまたとない前線基地になるという次第。アメリカさんがわが一家を大事にするわけもおわかりじやろう。

だが、わが一家も近ごろどうも住みにくくなつてきた。わが一家の爪あとがひどかつたもんだから日本国民が怒り出してしもうた。そいつがいささか心配だが、心配はだんだん大きくなるばかり。

「安保廃棄、改定阻止」の運動がだんだんつかくなつてきて困つたもんだと思つていたら、東京地裁の伊達とかいう裁判長は安保条約も行政協定も刑特法も、わが羅一家は全部憲法違反だと判決しよつた。全くカツクンショツクじやわい。

### 七年間のアトキズアト

### 祖国のなかの異国

### 失われた独立日本

大東京の東北の磯り場池袋から発する西武線で四十五分、狭山ガ丘駅をすぎる頃から電車は米軍飛行場（ジョンソン基地）の中に入つてしまう。稲荷山公園駅を通り、つぎの豊岡駅までのほぼ十分間は文字通り〝祖国の中の異国〟である。昨年九月七日、宮村祥乙君（当時武蔵野音楽大学一年、二十二才）が一米兵のしわざで殺されたのはこのあたりだ。何の罪もない一人の乗客が、とび込んできた弾丸に殺されてしまつたのである。それいらい電車が基地内を通る時運転手も乗客も早くここを通り過ぎればよいと生きた心地がしないという。

もちろんこれらは氷山のほんの一角にしかすぎないのだ。駐留米軍が起した刑事事件の数字をあげてみよう。昭和二十八年十月から昨年六月までの受理件数は、刑法犯では業務上過失致死が最も多く六二四三、ついで傷害三二四三、窃盗二四七六、暴行一五三六、強盗および同致死傷六一九、強かんおよび同致死傷三〇四、その他詐欺恐かつなど計一七九一六件、特別法犯はスピード違反など道路交通取締法違反一四三一四件を筆頭に関税法、麻薬取締法違反など計一五五四八件、総計三三四六四件に上つている。これに占領中（昭和二十七年以前）とそれ以後の一年半も加えなければならない。被害者の泣き寝入りで明るみに出ないものも相当あると思われるので、その数字はおそらくぼう大なものだろう。

在日米軍が占有している基地をみよう。五二年四月安保条約と行政協定で日本側が〝提供〟した施設区域は、演習場、兵舎、集団住宅飛行場、港湾施設、工場、倉庫、医療施設、通信施設などその面積は民公有約二億坪、国有約二億一千万坪に及んだ。その後米軍の移動により一昨年末には面積はほぼ半分となり、基地数も最高時の千から現在では九十くらいまでに減つたことになつているが、米軍は「極東防衛のための最低条件」として横須賀、佐世保、厚木、岩国（以上海軍）府中、立川、横田、板付、三沢、（以上空軍）座間（陸軍）などを着々と整備強化しており、絶対手離さないといつている。

### のい　定ら　改ね

### 待ちきれない　憲法改悪

ところはワシントン、米国務省の一室。時は一九五〇年八月三十日である。鳩山内閣の外相重光葵が幾相河野一郎、民主党幹事長岸信介らを従えて座り、向う側にはダレス国務長官、ロバートソン国務次官、ラドフォード統合参謀本部議長らの米首脳がズラリと席を連ねていた。

重光「日本国民の間では安保条約は不平等条約だと非難され、それが反米感情をあおりたてているので、この際条約を改定したいと思うのですが……」

ダレス「安保条約は元来暫定的なものでいずれは改正しなければならんが、まだその時期じやない第一、安保条約を双務的なものにすれば日本は海外派兵ができるかね？」

安保改定したけりや憲法を改定（海外派兵ができるように）して出なおしてこい、というわけだ。日ソ国交回復で米ににらまれた鳩山内閣が、何とか米のごきげんをとりなして安保改定の約束をとりつけようとしたのだが、ダレスの一声であつさり一しゅうされてしまつたのである。そして翌三十一日発表された共同声明にはこんな一コマがもぐり込んでいた。「日本ができるだけすみやかに自国の防衛のための第一次的責任をとり、西太平洋における国際の平和と安全に寄与することができるような諸条件を確立するため、いつでも協力的な基礎に立つて努力することが合意された」。このような海外派兵の「諸条件が実現された場合には現在の安保条約をもつと相互性の強い条約に変えることが適当であろうということも合意された」。アメリカの新聞は一せいに「日本は海外派兵を約束した」と書きたてた。重光、岸らはやつきになつて打ち消したが、現われた馬脚はかくしおおせなかつた。当の米政府筋がはつきり言明したからである。「安保条約を双務的なものにするということは……日米双方とも将来日本が海外派兵できるようになることを考え方の基本としている」。

改定がにわかに具体化したのはなぜか？安保改定＝日本の海外派兵という「日米双方の考え方の基本」が変つたわけではもちろんない米が日本の海外派兵を憲法改定まで待つておれなくなつたのだ。

ソ連の人工衛星、ICBMの完成社会主義諸国の急テンポの建設、平和勢力の増大にあせつた米はアラブのカケに失敗し、台湾水域での緊張激化に力をそそいでいた。「台湾海峡の危機とともに日米相互防衛体制が急速に促進されることになつた」（ニューヨーク・タイムス＝58・8・28）のである。

とにかく日本を核兵器基地として完成させること、中ソを敵とした岸・李・蔣の東北アジア軍事同盟（NEATO）をつくりあげることが米にとつて一日も早く必要となつたのだ。そこで米は「憲法改定――安保改定――海外派兵――NEATO」というこれまでのコースを「安保改定――軍実上のNEATO結成――海外派兵――憲法改定」という新コースへのりかえたのである。日本はこうして李承晩、蔣介石との心中同盟にバク進しているのである。

日米両国政府は交渉を国民の目のとどかぬところでつづけている。悪事は公然とは行われない。条約締結の時も行政協定調印の時も、国民には一言も知らされはしなかつた。そしてまた、こんども秘密の中に日本の国民と、国土の運命が決められようとしているのである。